

主の現存 伝える預言者に 教皇、「主の奉献の祝日」ミサで



2月2日、「主の奉献の祝日」を祝うミサの司式中に、修道女から奉納のささげ物を受け取る教皇レオ14世 (OSV)



(OSV)

四旬節

希望と喜びを証しする者に 奉献生活者のミサ



1月31日、東京・千代田区の麹町教会主聖堂でささげられた「奉献生活者のミサ」



2月2日、「主の奉献の祝日」を祝うミサでの教皇レオ14世 (OSV)

- 国際**
- 主の現存伝える預言者に 教皇、「主の奉献の祝日」ミサで 1面
 - 教皇、断食の重要性を力説 教皇、四旬節メッセージで 2面
 - 教皇庁 ウクライナ人道支援強化 2面
 - 教皇の一般謁見講話 3面
 - 国際記事ダイジェスト 4面
 - 教皇、奉献生活者を称賛「主の奉献の祝日」ミサで 5面

- 国内**
- 希望を生み出す者になる 奉献生活者のミサ 東京 5面
 - 国内記事ダイジェスト 6・7・8面
 - 〈文化〉信仰のまなざしで詠む短歌 歌人・大口玲子さん 8面
 - 〈文化〉カトリック国の「政教分離」問う展覧会 8面

- 主日の福音解説 9・10・11面
- 短歌・俳句 11面
- 訃報・告知板・番組・きょうをささげる(3月の祈り) 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース



カトリックジャパンダイジェスト 第11号
発行=カトリック中央協議会広報部
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

国際

教皇、断食の重要性を力説 教皇、四旬節メッセージで

【バチカン2月13日OSV】四旬節期間中に断食をするという古くからの習わしは、私たちが慢心から解放し、神を求める「飢え」に導く、と教皇レオ14世は2026年の四旬節メッセージの中で語る。40日にわたる四旬節の始まりを告げる灰の水曜日は、今年は2月18日。その灰の水曜日に先立つ2月13日、バチカンは「耳を傾け、断食する一回心の季節としての四旬節」と題された教皇メッセージを発表した。その中で、教皇は「古来の修徳的な実践」を受け入れ、食べ物を控えると同時に、「隣人を攻撃し、傷つけることばを控える」よう人々に奨励している。

四旬節は「私たちの信仰が活力を取り戻し、日々の不安や思い煩いの中で心を迷わ

すことのないよう、神の神秘を生活の中心にあらためて置く」時だ、と教皇は言う。

「食べ物の節制は古来の修徳的な実践であり、回心の歩みに不可欠なものです。断食は身体に関わるものだからこそ、私たちが何に『飢え』ており、自分を支えるために何が本質的なものであるかを明らかにします」

さらに断食は、「欲求」を識別し秩序付け、「私たちが常に義に飢え渴く者とし、諦めから解放して」くれるものだ」と述べる。

「断食は、恵みの支えによって罪と悪から離れようとする内的な努力の目に見えるしるしとして、より節度のある生活様式を身に着けるための他のかたちの自己放棄も含むものでなければなりません。なぜなら、『節制だけがキリスト教的生活を強め、真実な

ものとする』からだ、と教皇は強調する。

主のみ声に耳を傾ける機会に

また、教皇レオ14世は、カトリックの信者たちにミサにあずかったり、聖書を読んだりすることで、神のことばに耳を傾ける時を持つよう勧め、断食は神のことばを聴く準備を整えるための具体的な方法だと説明する。

「四旬節の旅路は、主のみ声に耳を傾け、キリストに従う決意を新たにするための貴重な機会となります」

教皇の「四旬節メッセージ」邦訳全文は、カトリック中央協議会のウェブサイトで読める。

メッセージ全文はこちら→



2月11日、一般謁見での教皇レオ14世(CNS)



教皇庁 ウクライナ人道支援強化 教会が苦しむ人々に寄り添うしるし

【ローマ2月10日OSV】戦争によって破壊し尽くされたウクライナに、マイナス15度にまで冷え込む厳しい冬が押し寄せている。ウクライナのエネルギー危機と健康危機を受けて、バチカンは人道支援を強化している。

バチカン・ニュースによると2月9日、80台の発電機を載せた3台のトラックが、ウクライナ人の教会として知られるローマの聖ソフィア教会を出発し、首都キーウとその南西約70キロのファスティウに到着した。

食料や医薬品を含む物資は、教皇レオ14世の要請を受け、教皇庁支援援助省が調整してウクライナに届けられた。

2月10日、OSVニュースの電話取材で、同省長官で医療福祉を担当するコンラート・クライエフスキ枢機卿は、支援という使命を通して、教皇はウクライナの人々の苦しみを忘れてはいないという目に見えるしるしを示したと語った。

「教皇は状況をとて、とても注視しています」と同枢機卿は語り、真冬の真ただ中に電力を奪われて生活する人々の苦しみは、誰も容易に想像がつかはずだと述べた。「人々が苦しんでいる所にこそ、教会は存在しなければなりません」

戦争も4年目に突入し、ロシアはウクライナのエネルギー・インフラに攻撃を集中させ、厳寒の冬の時期に、数千もの罪のな

い人々から電力や暖を奪っている。

ロイター通信によると、2月9日、ロシアのドローンによって、オデッサ地域のエネルギー施設が攻撃され、およそ9万5千人が電力を奪われた。

教皇レオは2月4日、一般謁見を終える前、カトリック信者に「ロシアによるウクライナへの爆撃が再開され、エネルギー・インフラへの攻撃の結果、厳しい状況に置かれているウクライナの私たちの兄弟姉妹たちを祈りで支える」よう呼びかけた。同時に、「厳寒の時期を耐えている人々を助けようと、ポーランドやその他の国々のカトリックの教区が連帯して手を差し伸べようとしている取り組み」に感謝を表した。

支援を確実に届ける教会

クライエフスキ枢機卿はOSVニュースに、支援物資が困っている人に確実に届くよう、支援援助省は、ドミニコ会が運営するセンターを含む、地元の司教、教区司祭たちと協力している、と語った。ドミニコ会は、高出力発電機をオデッサ、ハルキウ、キーウといった最も支援が必要な地域に設置してきた実績がある。

バチカン・ニュースによると、同省が送った医薬品の中には、抗生物質、抗炎症薬、栄養補助食品などが含まれ、他にも慢性的な不眠やトラウマ(心的外傷)のため就寝が困難な人

のためにメラトニンも含まれているという。

同枢機卿は、このような医薬品などを送り、教皇は戦争の見えない傷、安らぎを得られないといった問題にも対処したいと望んでいるとし、「これは愛のしるしです。たとえ何キロも離れたところにいようと、ウクライナは孤立してはいないということを示すしるしなのです」と強調した。

「教皇はあらゆるささいなことまでも考えておられます。私はウクライナに何度も行っていますが、また行きたいと思っています。なぜなら存在が大切だからです。ウクライナの人々と共にいて、共に暮らすこと。これこそが、ウクライナの人々にとって、とても大切な連帯のしるしとなるのです」と続けた。

バチカンから送られた支援物資は、ラテン典礼カトリック教会の信者だけでなく、ビザンチン典礼カトリック教会の信者や東方正教会の信者、教会とは関わりのない人々にも配られると同枢機卿は説明。

最後に、発電機を寄付したイタリアの人々に「支援疲れはありません」とウクライナを勇気付けた。

「私たちはまるで初代教会の使徒たちのようです。当時、人々は使徒たちの足元に支援物資を持ってきたのです。なぜなら、使徒たちならばその物資を必要としている人にうまく分配してくれると知っていたからです」「私たちも同じです。支援してくれた物資を教会や教区というネットワークを駆使して分配しています。そうして、全ての物資を、必要としている人々の手に確実に届けているのです」と同枢機卿はOSVニュースに語った。

教皇の一般謁見講話

教皇レオ14世は、毎週水曜に行われている一般謁見で、第2バチカン公会議とその諸文書についての講話を続けている。

人となったイエスを通して神を知る

1月21日

【バチカン1月21日CNS】神は人間となられたイエスを通してご自分を現されるのであり、単に「知的な真理の伝達手段」を通してではない、と教皇レオ14世は強調した。まさにイエスの生涯と死と復活を通して、人は神を知ることができるのだ。

教皇レオは1月21日の一般謁見で、第2バチカン公会議とその諸文書についての講話を続けた。この日も神の啓示に関する教会の教えが盛り込まれた『神の啓示に関する教義憲章』について説明した。

イエスを知ることによって、私たちは神の子どもとして神との関係を築くことができるが、それは人間となったイエスを通して明らかにされる、と教皇は説く。

「私たちは、キリストにおいて神を知るために、キリストの完全な人間性を受け入れなければなりません。神の真理は、人間から何かが取り去られたところでは完全に啓示されません。それは、イエスの完全な人間性が、完全な神のたまものを減少させることがないのと同じです。御父の真理を私たちに語るのは、完全な人間であるイエスです（ヨハネ1・18参照）」

さらに教皇レオは続けて、イエスは人となられることによって、「受肉し、生まれ、人々を癒やし、教え、苦しみ、死んで復活し、私たちのうちにとどまってくださる主です。ですから、受肉の偉大さをたたえるには、イエスを知的な真理の伝達手段と見なすだけでは不十分です」と語った。

神は私たちと対話し、同時にイエスは受肉した神のことばだと教皇は述べる。肉体という形を通して、神の真理が明かされるからだ。

「兄弟姉妹の皆さん、私たちはイエスの歩みに最後まで従うことによって、いかなるものも神の愛から私たちを引き離すことができないという確信に達します」と強調して、教皇は講話を締めくくった。



記事全文

神のことばは生きている現実

1月28日

【バチカン1月28日CNS】神のことばは化石ではなく、むしろ、聖なる伝統（聖伝）の中で発達し、成長して生きている有機的な現実だ、と教皇レオ14世は説く。

教会の「信仰という遺産」は、「私たちの信仰の全て— 教義、賛美、道徳的規範など— を含み、静的なものではなく、動的なものです。なぜならその遺産は、聖霊の導きの下、何世紀以上にもわたり、発達を遂げ、教会によってより深く理解されているからです」と教皇は1月28日、パウロ6世ホールで行われた一般謁見に集まった聴衆に説明した。

教皇は「第2バチカン公会議とその諸文書」についての講話を続けているが、今回は3回目となり、この日も『神の啓示に関する教義憲章』を取り上げた。

「イエスの名の下に保持し、理解する教会に委ねられたこの遺産は、私たちが複雑な人生のかじを取り、天の永遠の家へとたどり着けるように助けてくれます」と教皇は語り、「わたしたちも聖書の神のことばと聖伝を生き、忠実な証人となれますように」と祈った。

教皇レオ14世は、イタリア語での講話の中で、「聖伝は、聖霊によって聖書の豊かさと真理を理解し、歴史の変わりゆく座標のうちにそれを具現化します」と語った。



記事全文



1月28日、バチカンのパウロ6世ホールで行われた一般謁見の終わりに、教皇レオ14世が車いすの女性にあいさつすると、その女性が教皇の顔に触れた（CNS）

聖書は神と人の生きた対話

2月4日

【バチカン2月4日CNS】教皇レオ14世は2月4日、バチカンのパウロ6世ホールで開いた一般謁見の講話で、聖書は現代の信者たちに直接語りかけるものだとして述べ、聖書は神のことばが人間の著者を通して表現されたものだからだ、と強調した。

聖書が「現実や人間の希望と苦しみから切り離されると」、あるいは「理解できない、何も伝わらない、時代に合わない」言葉でべ伝えられると、聖書は「役に立たないもの」になってしまう、と教皇は警告する。

「第2バチカン公会議の諸文書」に関する講話を続け、聖書は過去の遺産ではなく、人々に神を知らせ、神を愛するように導くための生きた対話だ、と教皇は言う。神はその民を通して伝えることを選び、神のいつくしみと願いは人類に寄り添っているとした。同公会議の文書、『神の啓示に関する教義憲章』から引用し、「かつて永遠なる父のみことばが人間の弱さをまとった肉を受け取って人間と同じようなものになったのと同様に、神のことばは人間の言語で表現されて人間の言葉と同じようなものにされたのです」（13）と語った。



記事全文

渴望を癒やす神のことば

2月11日

【バチカン2月11日CNS】聖書を知らないことは、イエス・キリストを知らないことだと、教皇レオ14世は2月11日、バチカンのパウロ6世ホールで開かれた一般謁見での講話で語った。

「聖書を読み、黙想する究極の目的は、キリストを知ること、キリストを通して神との関係を築くことです。その関係は、会話あるいは対話と言えるでしょう」と教皇はイタリア語の講話の中で説明する。

2月18日から始まる四旬節に触れ、四旬節は「主への理解と愛を深め、私たちの心と生き方を顧み、同時にイエスとイエスの私たちに對する愛に、まなざしを再び向ける時です」と教皇は英語によるあいさつで述べた。

「私たちが日々自らの十字架を背負い、キリストに倣おうとする中で、四旬節中の祈りと断食と施しが、力の源泉となりますように」と祈りであいさつを終えた。



記事全文

国際

米枢機卿3人が声明 「真の道徳的な外交政策を」

【ニューアーク（米ニュージャージー州）1月19日OSV】3人の米国の枢機卿が共同声明を発表し、「私たちの国、アメリカのために真の道徳的な外交政策」を策定するよう求めた。米国は「冷戦の終結以降、世界での自国の動きに対する道徳的基盤について、最も深刻で痛烈な論争」に巻き込まれている。



記事全文

「教会の社会教説」は共通の価値 教皇、欧州会議で

【ルクセンブルク1月27日OSV】教皇レオ14世は、平和構築のための欧州会議の参加者に、「相対主義の広がり」と真理を単なる意見におとしめる行為は、恒久的な平和の構築に必要な道徳的基盤をおしぼむことになると警告した。

この教皇のメッセージは、1月23日にルクセンブルクで開かれた「欧州における平和構築、カトリック教会の社会教説と普遍的価値の役割は何か？」をテーマにした会議の聴衆に向けられた。バチカン・ニュースによると、このメッセージの中で教皇は、「基準と価値を伝える共通の真理を持たないのなら、平和に暮らし繁栄する」社会はない、と述べたという。



記事全文

カンタベリー大主教にマラーリー師 初の女性指導者

【ロンドン1月29日OSV】英国国教会第106代カンタベリー大主教に、サラ・マラーリー大主教が承認され、1400年の歴史を持つ同教会を導く初の女性大主教となった。



記事全文



1月28日、ロンドンのセント・ポール大聖堂で行われた「選出確認式」の終わりに、ほほ笑むサラ・マラーリー大主教。この確認式をもって、正式に第106代カンタベリー大主教となった(OSV)

教皇、聖ニューマンの記念日制定 10月9日に



聖ニューマンの肖像 (OSV)

【バチカン2月3日CNS】教皇レオ14世は、「歴史を通して巡礼の道を歩む教会の輝かしい光」である聖ジョン・ヘンリー・ニューマン教会博士の任意の記念日を一般ローマ暦に加えた。記念日は10月9日で、1845年にニューマンがカトリックに転籍した日に当たる。



記事全文

子どもを守る世界的取り組み 進展遅く 教皇が懸念

【バチカン2月5日CNS】教皇レオ14世は2月5日、バチカン使徒宮殿のクレメンスの間で開かれた、「危機からケアへ—子どもたちに対するカトリックアクション」の運営委員会へのあいさつで、世界の子どもたちに対する保護とケアはまだ不十分で、子どもたちには成功のチャンスがほとんど与えられておらず、虐待に苦しむ深刻な危機に直面していると指摘した。



記事全文

教皇、キリスト教諸教派はすでに一つ 「一致祈禱週間」

【ローマ1月25日CNS】全てのキリスト者は、行く道を照らし、慰めてくれるキリストにより頼むよう、全ての人を招くことを求められている、と教皇レオ14世は語った。1月18日から始まった「キリスト教一致祈禱週間」が25日に終了するその日の晩、ローマ市内の城壁外の聖パウロ大聖堂で行われたエキュメニカル（超教派）な祈りの集いで、教皇は語った。



記事全文

ホロコーストの犠牲者を悼む 教皇、「悲しみの記念日」に

【バチカン1月28日CNS】教皇レオ14世は、あらゆる形の反ユダヤ主義、偏見、抑圧、迫害を終わらせるよう訴えた。「集団殺りく（ジェノサイド）の恐怖が二度といかなる民族にも降りかかることがなく、相互の尊重と共通善に基づく社会が築かれるように常に警戒を怠らないことを、国際社会にあらためて呼びかけます」と教皇は1月28日、パウロ6世ホールで行われた一般謁見での訪問客へのあいさつの中で呼びかけた。



記事全文

米国とキューバの緊張高まる 教皇、「真摯な対話」求める

【バチカン2月1日OSV】教皇レオ14世は2月1日、バチカンのサンピエトロ広場に集まった人々と「お告げの祈り」を唱えた後、米国とキューバの間で緊張が高まっていることに懸念を示し、「真摯で効果的な対話」を求めた。



記事全文



1月26日、キューバの首都ハバナで銀行の支店に入るため並んで待つ人々。生存をかけて物価高騰に対処しようと準備している (OSV)

聖誕教会の洞窟600年ぶり修復へ

【ベツレヘム（パレスチナ・ヨルダン川西岸）2月3日OSV】ヨルダン川西岸のパレスチナ・ベツレヘムにある聖誕教会地下の洞窟の修復が600年ぶりに行われる。ギリシャ正教会総主教庁とカトリック教会フランシスコ会聖地管理特別管区は1月23日、共同声明でこの修復工事を正式に発表した。



記事全文



2025年12月8日、ベツレヘム（パレスチナ・ヨルダン川西岸）にあるキリストの生誕地とされる聖誕教会の洞窟で祈る、ウクライナ出身で現在はベルギーに住むアンナ・トゥベルダクリブさん (OSV)

教皇、奉獻生活者を称賛 「主の奉獻の祝日」ミサで

【バチカン2月2日CNS】教皇レオ14世は、世界にいる社会の周縁に追いやられた人の元へ行き、紛争のさなかでさえも、その人たちを見捨てることをしない奉獻生活を送る男女を称賛した。

「奉獻生活を送る人々は、安全な環境をししばしば奪われ、最も不安定な状況の中でも、命には決して犯してはならない聖性があるのだということを、言葉以上にその生活で語って思い起こさせてくれます」と教皇は2月2日、バチカンの聖ペトロ大聖堂でささげた「主の奉獻の祝日」を祝うミサの説教で語った。同時にこの日はカトリック教会では、「世界奉獻生活の日」も祝う。

「武器がごう音をたて、^{ごうまん}傲慢、利己主義、暴力がはびこっているところでさえ」、奉獻生活を送る人々の存在は、「イエスの言葉をのべ伝えています」と教皇はたたえた。

「親愛なる兄弟姉妹の皆さん、教会は皆さんに主の現存を伝え、主のための道を準備する預言者、あるいはメッセンジャーになっていただきたいと願っています」と教

皇は語りかけ、「祈りと愛に身を尽くす覚悟を基に、自らの存在をささげることを通して、皆さんはまず何よりもこの使命へと召されているのです」と続けた。

限りなく愛する平和のパン種に

さらに「皆さんは若者、高齢者、貧しい人、病气の人、刑務所へ入っている人にこ



2月2日、バチカンの聖ペトロ大聖堂で「主の奉獻の祝日」のミサをささげる教皇レオ14世(OSV)

そ、神の祭壇の上、またそのみ心の中に神聖な場所が確保されていることを証しするように求められています」とし、同時にその最も小さくされた人、一人一人は「神の現存の侵すことのできない神聖な場所であり、神と出会い、神を賛美し、神の栄光をたたえるために、そのみ前で私たちはひざまずかなければならないのです」と自身もアウグスチノ会士で、若い頃にペルーで宣教した経験を持つ教皇は語った。

自分を無にし、聖霊のうちに生きる生活を通して、奉獻生活者たちは「世界に紛争を乗り越える方法を示すことができます。

限りなく愛し、ゆるす人々が持つ自由さを通じて、きょうだい愛の種をまくことができます。」「神の摂理が皆さんを導くところがどこであろうと、平和のパン種、希望のしるしになってください」と教皇は励ました。

希望を生み出す者になる 奉獻生活者のミサ 東京

2月2日の「世界奉獻生活の日」を迎えるに当たり、奉獻生活者がそれぞれの召命の恵みに感謝し、特に初誓願10周年の奉獻生活者たちを祝福し祈るミサが1月31日、東京・千代田区の麴町教会主聖堂でささげられた。ミサ前には4人の奉獻生活者の召命体験の分かち合いも行われた。奉獻生活者と信徒ら約300人が集い、会場に来ることができない兄弟姉妹のためにオンライン配信もされた。

ミサを主司式した菊地功枢機卿（神言修道会）は説教で、1月6日に聖なる扉が閉められるまでの希望の聖年を通じて、「(私たちは)希望の光を全ての人に届けること

ができたでしょうか」と会衆に問いかけた。そして「シノドスの教会とは、希望をもたらす巡礼者として共に歩み、生きる共同体となること」と指摘。菊地枢機卿は、1月7日と8日にバチカンで開かれた臨時枢機卿会議で、教皇レオ14世は「多くの人の声に耳を傾ける姿勢」を教皇自身と教会全体が持つことの重要性と、シノドスの教会となる道を継続することを明言したことを紹介した。

また奉獻生活者の役割の一つは「率先して真の霊的生活を生き、その共同体の中で教会のシノドス性を具体的に生き、希望と喜びを証しすること」と述べた。社会は希望を必要としており、いのちの尊厳が守られる社会を生み出すようにと願った。

ミサの終わりに奉獻生活者の担当司教である山野内倫昭司教（サレジオ修道会／さいたま教区）が、初誓願宣立10周年の奉獻生活者たちを祝福し、記念品を贈った。山野内司教は、ヨハネによる福音書15・16～17にあるように、神が召命の

道に招き「わたしの名によって父に願うことは何でも与えられる」のだから、神の力を信じ、イエスの名によって困難を乗り越えていくようにと励ました。

ミサに参加したレ・テイ・トゥ・フォン修道女（31／福音史家聖ヨハネ布教修道会）は、来日10年目。「自分の召命を新たにされました。(仲間が)自分と同じ召命の道を歩んでいることで、特別に分かち合わなくても、顔を合わせて、元気そうな様子を見て力づけられました。外国人同士、日本で生活する者として(日々の使徒職などで)同じ悩みを持っているので(励まされ)、くじけずに頑張ろうと思いました」

セルヴィ・エヴァンジェリー会員でベネズエラ出身のメンドサ・ダニーさん（54）は、コロナ禍を経て10年ぶりに来日した。「(今日の集まりに)希望がありました。日本の宣教は難しいですが、希望の種を皆の心に植えるように頑張りたいと思いました」

初誓願10周年の祝福を受けた橋本晶子修道女（50／援助修道会）は、カリタスジャパンの秘書をしている。「久しぶりに仲間たちや養成時期にお世話になった神父様たち、先輩たちに出会い、皆さまの支えとお祈りあってのことだと思い返しました」と、節目の再会に感謝していた。

奉獻生活者のミサは、麴町教会のYouTubeチャンネルで視聴することができる。



山野内司教が初誓願10周年の奉獻生活者たちを祝福した



記事全文

国内

日本カトリック教誨師連盟 総会・研修会で 学びと意見交換

日本カトリック教誨師連盟（会長＝荻喜代治神父／広島教区）の総会・研修会が1月13日と14日、福岡市の旧カトリック神学院を会場に行われた。教誨活動に携わるカトリックの司祭、信者ら28人が集い、弱い立場に立たされている女性の支援について、また被収容者が出所する前に行う「出所前教誨」などについて講師から学び、意見交換を行った。

全国教誨師連盟のウェブサイトによれば、教誨とは、全国の刑務所、拘置所、少年院などの矯正施設で、「被収容者からの願い出に対し、各教宗派の教義に基づき、徳性を涵養し、人間性の回復を図る働きかけを行う」こと。この活動を民間ボランティアとして無償で行っている宗教家が教誨師で、宗教家ではない立場で同じ活動をする人を篤志面接委員と呼ぶ。

矯正施設は全国にあるが、カトリックとして教誨師や篤志面接委員を派遣できていない施設がまだ多数あることも、今回の総会で今後の課題に挙げられた。



日本カトリック教誨師連盟
総会・研修会参加者

派遣ミサは、同連盟の顧問司教である森山信三司教（大分教区）が司式した。参加者は、キリストに倣い、弱い立場に立たされている人々に寄り添う力を祈り求めた。



記事全文

将棋棋士・加藤一二三さん逝去 信仰と出会い 教会にも貢献

将棋棋士で、タレントとしても親しまれたカトリック信者の加藤一二三さんが1月22日、肺炎のため都内の病院で逝去した。86歳。

加藤さんは1940年福岡県生まれ。54年に当時の歴代最年少となる14歳7カ月でプロ棋士となり、A級（名人への挑戦権を争う順位戦の最高位クラス）にも最年少で昇級するなど天才棋士として注目された。数々のタイトルを獲得したほか、将棋界で多くの賞も受けている。77歳で現役最高齢勝利を挙げ、2017年に引退していた。

20代後半、棋士として行き詰まりを感じていた時、自身の子もたちが通うカトリック学校を保護者として訪問する中で信仰と出会い、1970年に東京・下井草教会で受洗した。代父は作家の遠藤周作氏。その後、所属した教会で結婚講座を長く担当するなど、教会活動にも積極的に関わった。

86年には、職務や技能によって教会に貢献した人に授与される「聖シルベストロ教皇騎士団勲章」を、当時の教皇ヨハネ・パウロ2世から贈られている。

プロ棋士として地方で対局する機会が多かった加藤さんは、会場近くにあるカトリック教会を探し、対局前日によく聖堂で祈ったとカトリック新聞に語っていた。信仰に関する著書に『だから、私は神を信じる』（日本キリスト教団出版局）がある。



加藤一二三さん
2020年、麴町教会で

日米5司教「核軍縮への進展」要請 核兵器禁止条約発効5周年に声明で

核兵器禁止条約（2021年）の発効5周年となった1月22日、同条約の批准拡大を願う「核兵器のない世界のためのパートナーシップ」（PWNW）の日米5司教の名前で声明が発表された。



2023年8月9日、原爆で被爆した長崎・浦上教会でささげたミサでの日米の司教ら（写真提供＝長崎教区）

声明では、祝意を表すとともに、同条約に賛成する立場を示している。また核兵器保有国の問題に触れながら、世界の指導者に対して、核兵器を廃絶するための核軍縮を具体的に進展させるよう要請。核廃絶がカトリック教会の悲願であることも示している。

声明を発表したのは、米サンタフェ教区のジョン・ウェスター大司教、米シアトル教区のポール・エティエンヌ大司教、長崎教区の中村倫明大司教、広島教区の白浜満司教、そして長崎教区の高見三明明誉大司教。いずれも「過去に核兵器による被害を受けたか、または今もその危険にさらされている地域を管轄」する司教たちだ。

この声明は、今年11月から12月にかけてニューヨークで開催される核兵器禁止条約の再検討会議に向け、PWNWが今後進める活動を視野に入れ発表された。

白浜司教によれば、PWNWでは同再検討会議に合わせ、現地で平和巡礼を行うことを検討しているという。



記事全文

クリシタン版『日葡辞書』編さん過程探る 大阪大学でワークショップ

17世紀初めにイエズス会士によって作られた、ポルトガル語で日本語を解説する『日葡辞書』の編さん過程を探るワークショップが2月3日、大阪府豊中市の大阪大学で開かれ、オンラインを含め約120人が参加した。

『日葡辞書』は1603年に本篇、04年に補遺篇が長崎で刊行されたが、印刷前の稿本（下書き）の一部が2024年にフランス・トゥールーズ、25年に中国・北京で相次いで見つかり、編さん過程の新たな解明への期待が高まっている。

16世紀末から17世紀初めにかけて、日本を中心にイエズス会が刊行した印刷物は今日「クリシタン版」と呼ばれている。北京とトゥールーズで発見された資料はどちらも『日葡辞書』とは異なる「クリシタン版」の表紙の補強材に、『日葡辞書』の稿本が使われていた。

大阪大学大学院教授の岸本恵実さんは、今回の稿本発見の経緯を紹介。この稿本と、刊行された『日葡辞書』との比較から推敲の跡などが確認されたと報告した。上智大学基盤研究センター・特任助教の中野遙さんは、トゥールーズと北京の資料を合わせることで複雑な編さん作業をうかがい知ることができると指摘した。製本材料として再利用された下書きの存在は、今後も新資料が発見される可能性を示している。



ワークショップでの質疑応答
（写真提供＝主催者）



記事全文

国内

希望もたらした「^{あり}蟻の町のマリア」 尊者・北原^{さとこ}怜子帰天記念ミサ

戦後の東京下町で貧しい人々の中に生き、「^{あり}蟻の町のマリア」として知られた尊者・北原^{さとこ}怜子の帰天記念ミサと祈りの集いが1月25日、東京・江東区の潮見教会で行われた。兵庫や山梨など遠方からの参加者もあり、約170人で聖堂は満席になった(=写真)。

北原^{さとこ}怜子は1929(昭和4)年に東京で生まれ、20歳で受洗。「焼け跡の聖者」と呼ばれたゼノ・ゼブロフスキー修道士(コンベンツアル聖フランシスコ修道会)と出会い、廃品回収で生計を立て

ていた人々の生活共同体「蟻の町」に入り、町の一員となって自身も廃品回収を始める。病により一時的に離れるが、最後には永住を選び、都に退去を迫られる町の



人々と苦楽を共にした。生活の不安と恐れの中で心を閉じて生きていた人々が、怜子を通して信頼と希望を持ったことを奇跡と呼んだ蟻の町の人もいた。2015年1月22日、尊者に上げられている。

ミサを主司式したアンドレア・レンボ補佐司教(東京教区)は、怜子が「助ける人」としてではなく、「共に生きる人」として蟻の町に入ったことを取り上げ、特に若者たちに向けて、「他者に無関心でないこと、目をそらさないこと、出会いを大切にすること」を神は必ず求めておられると語った。



記事全文

横須賀「月例デモ」

反戦・平和へ 小さく続けて600回

米軍横須賀基地のある神奈川県横須賀市では、毎月最後の日曜日、市民が反戦と平和を呼びかけて街を歩く「月例デモ」(主催=「非核市民宣言運動・ヨコスカ」「ヨコスカ平和船団」)が半世紀前から続いている。

600回目となった1月25日は、街の人々への感謝を込めてデモを行った。参加者は通常30~40人だが、当日は沖縄などからも集まり、65人が約1時間かけて歩いた。地元の横浜教区の司祭や東京教区の信徒の姿もあった。海上自衛隊横須賀地方総監部や米軍基地のゲート前で「戦争に行かないで」などと呼びかけた。

市内の公共施設で「感謝の集い」も行われた。「軍都解体」を基本スローガンとしながらも、米兵や警察官を含む「街との対話」を試みてきたデモ。主催する2団体で活動してきた新倉^{ひろし}裕史さんは、かつて参加者が5人まで減ったことで助け手が現れ、特定の団体が行うデモから「地域のデモ」とも言える活動に変容したと振り返った。

同市に住む^{めおたかお}名生尚雄さん(同市・横須賀三笠教会)は、新メンバー



月例デモでは、2008年の原子力空襲横須賀配備に今も抗議を続けている

としてあいさつ。昨春から個人的に参加するようになり、月例デモは「(平和を祈念する)巡礼」だと思つと話した。



記事全文

ワールドユースデー 27年のWYDに向け交流

韓国・水原教区の青年たち ^{スウォン}さいたま教区訪問

2027年夏に韓国・ソウルで開催されるワールドユースデー(WYD)に向けて日韓の青年の交流を深めようと、韓国・水原教区^{スウォン}の青年たちが2月6日から8日まで、さいたま教区を訪問した。一行は中高生や大学生、社会人、司祭らを含めた23人。

7日、訪問団はさいたま教区本部事務局に到着すると、出迎えた山野内司教に一人ずつ自己紹介し、中高生グループが聖歌をプレゼントした。さらに山野内司教のギター弾き語りに合わせて、歌の一部を日本語で唱和し、けん玉遊びを楽しんだ。

昼食後の「青年のつどい」で、青年たちは互いに日本語、韓国語を織り交ぜてあいさつ。韓国の中高生グループが歌とダンスを披露し、参加者全員で聖歌を日本語で歌った。その後の交流会では、日本と韓国の茶菓を囲み、互いにスマホの翻訳アプリを駆使しながら共通の話題



スマホの翻訳アプリを駆使し、共通の話題で交流する日韓の青年たち



記事全文

「雪の聖母祭」で平和祈る

山形・新庄教会(新潟教区)

雪の中、ろうそくの光で聖母に祈る「雪の聖母祭」が、新庄教会(巡回/山形県最上郡)で毎年行われている。今年も2月7日と8日、成井大介司



教(新潟教区)と信徒30人以上が集い、共に平和を願って祈りをささげた(=写真)。現地では1週間前に2メートルの積雪があったが、当日は風がなく、時々おだやかに雪が降った。

7日、夕方6時から聖堂で祈り、成井司教が聖母について話した。「イエスの十字架のもとにたたずむマリアは、絶望的な状況にありながらも全てを受け入れ、神に信頼し、祈っていました。その祈りは、イエスの復活によってもたらされた平和につながっていくのです」

平和のためにロザリオの祈りを日本語と英語でささげた後、聖母像を先頭にろうそくと花を持ち、歌いながら、洞窟に見立てたかまくらまで歩き、聖母像を安置して献花し祈った。

新庄教会は1980~90年代、自治体の要請に応じて結婚のために来日したフィリピン出身の信徒が増えた。その人々の「教会が欲しい」という熱意を、高齢化した日本人信徒が見守り、両者が心を通わせて2010年に新庄教会が献堂された。

「雪の聖母祭」は毎年、2月の週末に行われる。



記事全文

国内

南海トラフ地震を想定 横浜教区とCJ-ERSTが研修

「南海トラフ地震が起きた場合の教区の初動対応」をテーマにした横浜教区（梅村昌弘司教）の災害対応ワークショップが1月9日、横浜市同教区本部事務局で行われた（＝写真）。カトリック中央協議会の「カリタスジャパン緊急対応支援チーム」（CJ-ERST）が企画し、横浜教区と共催した。同教区から梅村司教はじめ13人が参加。カリタスジャパン責任司教の成井大介司教（新潟教区）とCJ-ERSTのメンバーら計8人の話を基に教区の災害対応について学び、発災時の初動対応について意見交換を行った。



話を基に教区の災害対応について学び、発災時の初動対応について意見交換を行った。



記事全文

憲法から平和主義を考える 研究者を講師に

憲法の視点から安全保障と平和を考える講演会が1月31日、東京・千代田区の麴町教会で開かれ、約40人が参加した。講師は憲法研究者、青井未帆さん（学習院大学専門職大学院教授）。「個人的には、人権や平和を考えるのは市民の務め、キリスト者の務めだと思います」と言う青井さんが、近年の安全保障政策の変化などについて話した。主催は麴町教会「メルキゼデクの会」。



記事全文

回勅『主は私たちが愛された』 記者から学ぶ

前教皇フランシスコの最後の回勅『主はわたしたちを愛された』について記者、増田健神父（クラレチアン宣教会）から学ぶセミナーが1月22日、東京・千代田区の麴町教会で開かれた。回勅で前教皇が説いたのは「イエスのみ心」への信心。増田神父は、イエスのまなざしで自分と他の人を見つめるよう呼びかけた。25人余りが参加。同教会とイエズス会社会司牧センター共催した。



記事全文

長生炭鉱 ダイバー死亡事故「今は遺族支える」

山口県宇部市沖の旧長生炭鉱跡で2月7日、遺骨収集調査をしていたダイバーの1人が水中に亡くなった。原因は特定されていない。遺骨収集事業を主催する市民団体「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」代表者は会見で、今は遺族を支えることに全力を尽くしたいと述べた。この遺骨収集事業は日韓の司教団が支援している。同会事務局長は「遺骨収容のためにもう一度立ち上がっていく時間を頂きたい」と、会の歩みを続けることを示唆した。



記事全文

原発再稼働に抗議声明 日本カトリック正義と平和協議会

日本カトリック正義と平和協議会（担当司教＝エドガル・ガクタン）は2月9日、東京電力柏崎刈羽原子力発電所6号機の再稼働に抗議する声明を発表し、東京電力と日本政府に対し、再稼働の断念を強く求めた。



記事全文

文化

信仰のまなざしで詠む短歌

歌人・大口玲子さん

宮崎市の南宮崎教会信徒で歌人の大口玲子さん（56）が昨年末に歌集『スルスムコルダ』（ふらんす堂）を出版した。題名はラテン語で「心を上に」を意味する。2024年の1月1日から2月31日まで毎日詠んだ366日分の短歌を収録。日常の出来事や家族への愛、社会問題への思いを、信仰のまなざしを通して五七五七七にすくい上げた。



歌集『スルスムコルダ』

高校時代、新聞歌壇を通して短歌に親しみ、俵万智さんの歌集『サラダ記念日』に触れて関心を深めた。大学では佐佐木幸綱さん主宰の歌誌「心の花」に入会。日本語教師として中国に赴任した際、信仰を持つ同僚の姿に引かれ、「イエス様への憧れ」を抱く。歌誌の先輩で長崎で被爆した竹山広さんの影響も受け、2008年の復活祭に仙台で洗礼を受けた。



大口玲子さん

2011年、東日本大震災で「いのち」への価値観が大きく変えられた。住居は半壊。ライフラインは全て止まり、お金があっても食べ物が手に入らない。近くの海岸には津波犠牲者の亡きがらが多数上がった。「生きていることはもろいんだと知りました」

震災を機に宮崎へ移住。「飢え渴くように」神を求めるようになった。震災と原発事故を体験した者として、鹿児島・川内原発運転差し止め訴訟に加わるなど社会問題にも関わり、社会的な主題の歌も増えていった。

これまで宗教色を抑えてきたが、本書では「腹をくくった」と話す。「毎日1首、正直に取り繕うことなく詠んでこの歌集を出して、信者、社会活動家、歌人、母としての自分がうまく収まってすっきりしました」



記事全文

カトリック国の`政教分離、問う展覧会

「ライシテからみるフランス美術—信仰の光と理性の光」 講演会で楽しみ方を紹介

三重県立美術館（三重県津市）で3月22日まで開催中の「ライシテからみるフランス美術—信仰の光と理性の光」は、かつて国教がカトリックだったフランスの`政教分離、（ライシテ）をテーマにした展覧会だ。

本展を「もっと楽しむため」の講演会が2月7日、学術協力者で、ライシテ研究第一人者の伊達聖伸さん（東京大学大学院総合文化研究科教授）を講師に迎えて開催された。

伊達さんは、ライシテはフランスの「国の根幹」となる重要な概念であり、フランス革命（1789年）を重要な起点にしていると解説。革命後も共和派とカトリックの攻防が続く中で宗教の世俗化は進んだが、この展覧会で分かるように、世俗化は「新しい宗教性」を生み出すことにつながっているのではないかと問いかけた。

本展は、政治と宗教の争いに影響を受けたフランス美術の歩みをたどる。出展作はミレー、ロダン、シャガールらによる油彩画、版画、彫刻など約200点（会期中、一部展示替えあり）。



モーリス・ドニ 《聖母月》1907年 ヤマザキマザック美術館



記事全文

★チケットプレゼント★

本展のチケットを5組10名様にプレゼント致します。ご希望の方は、はがきに、名前、郵便番号、住所を明記の上、〒135-8585東京都江東区潮見2の10の10 カトリックジャパンダイジェスト「ライシテからみるフランス美術—信仰の光と理性の光」係まで。3月5日（木）当日消印有効。賞品の発送をもって発表に代えさせていただきます。

主日の福音解説

3月1日（四旬節第2主日）

マタイ 17・1-9

イエスだけを見て、イエスに聞く

今週の福音は「六日の後」という言葉で始まる（ただし、『朗読聖書の緒言』に従い冒頭句が省かれ、代わりに「そのとき」が補われている）。これは、記述内容が大きく変わっても、6日前に起こった出来事とのつながりが保持されているという示唆であろう。6日前にあったのはイエスの死と復活の予告であり、さらに言えば、その際「主よ、とんでもないことです」と言ったために叱責を受けることになったペトロの失態である。

その「六日の後」、イエスはペトロをはじめ3人の弟子だけを連れて山に登る。山頂でイエスの姿は輝き、モーセとエリヤという旧約を代表する2人の人物と語り合う。こうした栄光の姿は、前段で語られた受難、死、復活に関する予告の、ある意味では補完的役割を担っていると考えることもできる。つまり、前段から始まった予告はここに来てようやく完了するという解釈である。光り輝く主の姿は明らかに復活を先取りした世界の描写であろう。ただし、6日前の出来事に再度立ち返るならば、ここへ至るまでには受難と死を経ることが不可欠とされており、「変容」の本質は実際には一人一人が自分の十字架を取って主に従うようにとの招きを受け入れたときに初めて理解されるものと思われる。

ところで、福音の後半部分には次のような一文がある。「彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにだれもいなかった」。ギリシャ語の原文ではここにホラオー（＝見る）という動詞が使われている。新共同訳聖書も「顔を上げて見ると」という表現でホラオー（＝見る）を考慮した訳にしている。実はこの先を書くのはかなり勇気のいることなのだが、専門家にお叱りを受けるであろうことを百も承知で、個人的な黙想のためにあえて次のような訳でここを読んでみたい気持ちがある（当然、誤訳であることは前提の上だが）。「彼らは目を上げると、イエスだけを見た（直訳は、イエスだけしか見なかった）。私がこの一文に注目するのは、ここにはキリスト者の霊性にとって大切なことが書かれていると思うからである。起き上がった弟子たちの前にはさまざまなものがあつたに違いない。もしかしたら、モーセとエリヤもまだそこにいたのかもしれない。しかし、それでも弟子たちはイエスだけを見たのである。



ここでの見る意味をさらに鋭く浮かび上がらせるのは、恐らくこれを前節との関連で理解するときであろう。前節には次の言葉があつた。「これはわたしの愛する子、わたしの心に^{かな}適う者。これに聞け」。雲の中から語る声を弟子たちは聞いたのである、これに聞けと。イエスだけを見て、イエスに聞く。これこそがキリスト教的霊性の本流であろう。われわれは今、情報過多と言われる時代を生きている。「雲の中」とは、何が真実であるのか厚い雨雲に覆われて見えなくなっている時代の暗喩のように思えてならない。暗中模索を続けながら懸命にこの時代を生き抜こうとするわれわれに向かって、今も雲の中から声が響くのである。これだけを見、これに聞けと。
くまがわゆきのり
(熊川幸徳神父/サン・スルピス司祭会)

3月8日（四旬節第3主日）

ヨハネ 4・5-42 または

4・5-15、19b-26、39a、40-42

イエス様が与える水

四旬節第3主日に当たり、今日は特別に「水」について一緒に黙想したいと思います。今日の第1朗読でわたしたちは、マサとメリバで起こった出来事について聞きました。民は喉が渇いて水を欲しがっています。しかし、荒れ野の真ん中でどこからも水を得られそうもなかったため、民はモーセに不平を言い出しました。すると、神様はモーセを通して民に水を与えてくださいました。



水が出るとは全く考えられない岩から水が流れ出ました。そこで人々は初めて「主は我々の間におられる」ことに気付きました。今日の朗読にも書いてあるように、マサは「試し」、メリバは「争い」という意味で、神の民がモーセと争い、主を試したからそのように名付けられたのです。イスラエルの民はそうした経験を忘れないために、今日の答唱詩編である詩編の95章を歌う時、最後に続いて「あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように、心を頑^{かたくな}にしてはならない。あのとき、あなたたちの先祖はわたしを試みた。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した」(詩編95・8-9)と歌っているのです。

今日の福音で、イエス様はあるサマリアの女と長い対話を交わされます。その主題は「水」でした。イエス様は「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない」と言われます。そして、「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」とも言われます。

もしわたしたちが水を求める必要がないとすれば、それはわたしたちの生命を維持するために必要な水を十分に摂取したからでしょう。ところが、わたしたちが生きている限り、その水分はわたしたちの活動によって段々なくなります。そのため、わたしたちは再び水を求めるようになり、水分を補給しなければなりません。しかし、イエス様の水はその人の内で泉となってそこから水が湧き出るので、再び水を求めなくてもいいとされているのです。

それでは、イエス様がわたしたちに与えようとするその水は一体何なのでしょう。そのサマリアの女もそのような水があれば再び水をくみに来なくてもいいから、その水を下さいと、イエス様に願います。しかし、イエス様はその女に水を与えるどころか、彼女を困らせることをお尋ねになります。それからその女はイエス様との対話によってイエス様が、来たるべきメシアであることに気づき、自分の町の人々にこのことを告げました。では、永遠の命に至る水を求めたそのサマリアの女にイエス様が与えてくださったものは何だったのでしょか。

それはまさにイエス・キリストがメシアであること、すなわちご自分に対する信仰なのです。今日の第2朗読で使徒パウロは、イエス・キリストがわたしたちに与えてくださったその信仰について話しながら、キリストによって神との間に平和を得ていると言っています。その信仰はわたしたちのうちに与えられています。キリストに対するその信仰がわたしたちの内ですべてに渇くことのない泉となるのです。使徒パウロが言っているように、わたしたちはその信仰によって義とされ、永遠の命を得、神の栄光にあずかることになるからです。(ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父/韓国殉教福者聖職修道会)

主日の福音解説

3月15日（四旬節第4主日）

ヨハネ 9・1－41

または 9・1、6－9、13－17、34－38

大丈夫！

生まれつき目の見えない人について、弟子たちがイエス様に「この人の不幸は誰のせいですか？」「自業自得ですか、それとも親のせいですか？」と上から目線で見、とんでもないことを尋ねています。イエス様はさぞがっかりされたことでしょう。弟子たちは苦しみの中にある人に対して、その痛みや悲しみを見ようとも、気付こうともせず、無関心でした。そこにはやさしさ、思いやりは一切ありません。ヨハネ福音書はあえてこのやり取りを残しています。イエス様は怒ることなく「神様のお働きが明るみに出るため」とお答えになり、汚れ、きたないものである唾で、安息日に禁じられていた土をこねる作業をしてまで、その人に関わろうとされます。それはその人に向けられている悪意を自分に対して向けさせ、少しでもその人のかばうためのイエス様のやさしさに満ちた行為です。イエス様なら土を使わなくても簡単に目をお開きになることができたはずで

す。その人の両親は自分たちの子どもが道端で物乞いをしていたことを知っています。ほんとに苦しく、悲しく、もどかしかったでしょう。お母さんは自分の作ったご飯を自分の子どもに食べさせてあげたかったでしょう。それを許さない現実、それに対して、怖くて物の言えない悲しい社会。イエス様は負けません。信仰の目を開かれた彼ももう負けません。徹底的に責めてくる人々にたじろぐことなく、彼は力強く証しします「神様は、神様をあがめ、神様のみこころを行う人の言うことは聞いてくださいます。…あの方が神様の元から来られたのでなければ、何もできなかったはずで」と。弟子たちはさぞ恥ずかしくなったでしょう。イエス様のこころに全く気付いていなかった自分たちのことを。

ある方と神父さんの話です。その方はずっと家におられました。ほとんど外に出ることなく人目につかないように生活されていました。神父さんはその方に「教会でお手伝いしてください」とお願いされました。外に出て生まれて初めて教会の祭壇をきれいに飾る。不安や戸惑いがあったはずで

す。新しくお友達もでき、喜びのうちに神様のため、教会のために一生懸命祭壇を飾られていました。「あの神父さんがわたしに声をかけて救ってくださったんよ」。うれしそうに話されるその方の目には深い寂しさもありました。「神父さんに置いていかれた」と。その神父さんはさっさと天国に行かれました。その神父さんとお別れの時に、聖堂の真ん中で大声で泣いておられるその方を見て、わたしは「神父さん、なんで最後まで一緒にいてあげなかったんですか？」と心の中で文句を言いました。

福音の最後に、イエス様は「あなたは、もうその人を見ている。

あなたと話しているのがその人だ」とご自分が癒やした人にはほほ笑んでくださっています。

神父さんは一緒にいることよりも、イエス様と一緒に天国へ行くことを教えたんだろうな。

(寺浜亮司神父／福岡教区)

3月22日（四旬節第5主日）

ヨハネ 11・1－45 または

11・3－7、17、20－27、33b－45

復活の命への招き

死んだラザロを生き返らせるという奇跡を通して復活の命へと招くイエスの姿を語っているのが、本日のヨハネ福音書の内容です。

マルタとマリアの姉妹は兄弟ラザロが重い病だということをイエスに知らせます。これを聞いたイエスは「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」と述べています。



イエスがラザロの元に到着した時、彼はすでに死んでいました。しかも墓に葬られてから4日もたっていたと説明されています。イエスを迎えたマルタは「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と嘆き、大切な人を失った悲しみの中に立ち尽くしています。ラザロは死んで4日もたっていて、いくら奇跡を行うことができるイエスといえども生き返らせることはできないだろうという無力感が漂っています。

ここから「復活」ということを巡ってイエスとマルタの対話が始まります。「あなたの兄弟は復活する」と話すイエスに「終わりの日の復活」については知っていると言っているとマルタは答えます。彼女はあくまでも知っているということであって、信じているわけではありません。そこでイエスは「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」と語り、人の命は死で終わるものではないことを教え、復活を信じる信仰へと導きます。「生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」。イエスの問いかけにマルタは「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」と信仰告白します。

マルタに代わってマリアがイエスと対面します。マリアもマルタと同じように「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」とやはり悲しみに打ちひしがれ、集まった人たちと一緒に泣いています。死は人間に絶望と悲しみをもたらします。ここでイエスは憤ったり、興奮したり、涙を流したりというように人間的な感情をあらわにします。自身の十字架の死を意識してのことなのではないでしょうか。ラザロを生き返らせる奇跡を通して示された神の栄光は、イエスの十字架の死と復活によって頂点に達します。イエスは命を与えることができるお方だと悟った人たちは信仰へと導かれます。「イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた」と本日の福音は結ばれています。

(立花昌和神父／東京教区)



主日の福音解説

3月29日 (受難の主日<枝の主日>)

マタイ 27・11-54

または 26・14~27・66

罪人を救うキリストに叫ぶ

教会は受難の主日に、主のエルサレム入城を記念します。軍馬ではなく、ロバに乗った柔和な王が、重荷を負う人々に平和を告げるため、都に来られました。マタイ福音書が引用しているゼカリヤ書9章の預言が、正にこの時キリストにおいて成就したことを、入城の福音は高らかに告知させます。

しかし、この日の典礼は、「ホサナ」という歓呼の声が、程なく「十字架につけろ」という罵声に変わったことをも明らかにするので、それを聞いて心が二つに引き裂かれるような思いをする方も多いでしょう。

当時の人々が、どれほどメシアの到来を待ち望んでいたかは、彼らがイエスを都に迎え入れた時の熱烈な様子からうかがえます。ミサの中で感謝の賛歌を歌う私たちも、彼らと同じ「ホサナ」という言葉で、主を私たちの元に迎え入れます。ですから私たちは、ミサのたびに、また特にこの受難の主日に、エルサレムの人々と声を合わせて主キリストを賛美するのです。

では、そんな彼らが、態度を一変させてイエスに向かって「十字架につけろ」と叫んだのなら、私たちもイエスに罵声を浴びせているのでしょうか。罪を犯し神に逆らうとき、確かに私たちは、そうしていると言わざるを得ません。罪人である私たちは、救い主の訪れを待ち望みながら、その方に逆らって生きるという二面性を抱えているのです。

こうした自分たちの矛盾を目の当たりにすると、私たちは打ちのめされそうになり、「ホサナ」という歌声からも力が失われかねません。しかし、元々この言葉は、「どうか救ってください」という意味だったのが、次第に歓呼の言葉として使われるようになったのだそうです。ですから、救いと罪に引き裂かれた二心を抱く私たちだからこそ、あえて「ホサナ」と叫ぶべきでしょう。

人は罪に汚れた自分の姿から目を背けているうちは、救いの必要性をあまり実感できません。しかし、それを直視すればするほど、「ホサナ・どうか救ってください」という叫びは、いよいよ

切実になります。人々を罪から救うために十字架に上られた主は、そのように叫ぶ私たちのうちに、ご自身への信頼を育み、二つに裂かれた心を癒やしてください、その業を体験する私たちの魂の奥底からは、賛美と感謝が湧き上がるでしょう。主の十字架により救いにあずかったことを知った

罪人の魂は、全身全霊で「ホサナ・主の名によって来られる方に、祝福があるように」と、歓呼の叫びを上げずにはいられなくなるのです。

(熊坂直樹神父/東京教区 カットは全て高崎紀子)



文化

短歌

春日いづみ道

はがきでの短歌投稿の規定は左下枠内を参照。下記QRコードからオンライン投稿も可。



久々の便りが届く午後三時封緘に見し十字のしるし

はっとりゑぬ

【評】届いた手紙の封緘を「十字のしるし」に見たところに独自性があり、手紙の内容がとても意味あるものを感じられます。午前中でなく「午後三時」との時間設定にも意図があるのでしよう。読み手の想像が広がります。

納沙布の岬に立ちてつひに見し祖母住みし秋勇留の島
はらはらと光あつめて散る銀杏ロザリオ手繰る緩き坂道
冬の朝晴れて筑波の峰ふたつはるかに望む時を恵まる
植木屋の刈込み済みし庭に見る水仙のみどり万両の赤
熊の噂に庭の柿の実みな落とす隠れいし小鳥は残せと叫ぶ
雲間より光の束が注がれる天に通じるヤコブの梯子
悔ひ多し楽しき思ひ出もまた多し主と会話せり眠れぬ夜は
思春期のわれへと誘う道しるベタルトタタンの餡色りんご
聖堂の扉に熊の絵が張られきちんとしてと文字が促す

東京 植竹 雄太
東京 向井美和子
東久留米 平山 努
秦野 遠藤 伸枝
那須塩原 林 秀雄
名古屋 富井 弘光
秋田 進藤八重子
岡山 宮崎 清子
秋田 畑山真理子

俳句

稲畑廣太郎選

はがきでの俳句投稿の規定は左下枠内を参照。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎雪しきり絵画となりしガラ窓

福岡 徳永 朝子

【評】窓枠が額縁となり雪景色が名画となった

仙台 三宅 温子

◎姥杉の太くなりけり初詣

初夢はノートの真中太字ペン

【評】樹齢何百年という杉杉が初詣を祝福する

冬うらら八十路の道をペダル漕ぐ

母の忌の添ひし父の忌古曆

神代より湧きたる井戸や寒の水

点滴を押してすすめば冬の草

東京 山口 岳人

何事も感謝感謝の初明り

豊橋 赤沢 進

春雨にふくらみきたる手紙かな

東京 草間をり絵

落葉掃逆らふひとつ手で拾ふ

和泉 中里 君子

目つむればいのちの真赤冬日向

西東京 一色 菊江

紅葉散る解体続く司祭館

秋田 畑山真理子

聖堂より見上げる空に柿ひとつ

さいたま 古澤 孝之

燃ゆる富士炎雲へと冬夕焼

府中 荒井 美邦

おさがりの母の帽子や冬薔薇

秦野 小泉早由美

着ぶくれて最後のひと日想像し

大分 本田 純江

投稿規定

短歌・俳句共に、未発表の自作をはがきまたはオンラインでお送りください。一回につき短歌は一人3首まで、俳句は5句まで。お名前に振り仮名を付けてください。はがきの送り先は、〒135-185 85 東京都江東区潮見2の10のカトリック中央協議会広報部広報課「短歌係」または「俳句係」。締め切りは毎月5日(必着)です。作品は選者の先生によって添削されることがあります。

計報

藤田京子修道女(聖心侍女修道会) 1月10日、神奈川県鎌倉市内の病院で逝去。100歳。1925年



東京都生まれ。47年同会入会。50年初誓願。56年終生誓願。入会当時は、同会が戦後の日本に根付くための創設期に当たる。清泉女学院の小学校、中学・高等学校、大学と創設が続き、全会員が一致して、その発展のためにまい進していた。そのような中、長年にわたり修道院の会計補助、受付、縫い物、台所などで奉仕し、学校で働く姉妹と一致して、日本管区の「礎」となった。その働きは、多くの人の前で目立つものではなかったが、主に修道院内のことを、心を込めて忠実に果たした。いつもほほ笑みを絶やさない、優しく謙虚な性格は、誰からも愛され慕われた。記憶力に優れ、会員は日本管区創設期のことや、その後の歴史について分からないことを尋ねていた。長上へはいつも「はい」と答えていた。100歳になり、車いす生活でも元気で、自分のことはほとんどできていた。最後まで向学心に燃え、読書、祈り、毎日の聖体礼拝を欠かすことはなかった。

宮川芳子修道女(シヨファイユの幼きイエズス修道会) 1月18日、同会仁川本部修道院(兵庫)



で老衰のため逝去。87歳。1938年長崎県生まれ。63年同会入会。65年初誓願。初誓願宣立後、大阪の信愛女学院の英語教諭として4年半勤務した後、同会本部や東京で勉学の時を過ごし、仁川本部で2年間、翻訳の奉仕に尽力した。77年からフランス・パリのカトリック大学神学部で留学した後、7年間同会総本部で翻訳や通訳の仕事に献身した。87年から日本管区の評議員・管区秘書として6年間奉仕。92年からは同会フランス総本

部の総評議員として長年にわたり重責を果たした。特にフランスの同会発祥の地を巡る「源泉の巡礼」のガイド、修道会や国際的な会議における通訳・翻訳、創立者の書簡集をはじめ修道会の種々の霊的遺産の翻訳のために尽力した。総顧問の任期終了後も総会計補佐や翻訳、通訳に献身し、他の修道会の総会や研修会の同時通訳者も務めた。使命に対する忠実さ、簡素な生活、弱い立場にある人や困窮する人の惜しみない献身は姉妹たちの心に深く残っている。2015年11月に帰国して療養生活となったが、優しい笑顔で訪問者を迎え、姉妹たちに安らぎを与えた人生だった。

渡辺淑子(としこ)修道女(殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会) 1月24日、札幌市内



の病院で肺炎のため逝去。92歳。1933年北海道生まれ。61年同会入会。64年初誓願。69年終生誓願。初誓願宣立後、札幌の藤女子短期大学家政科(当時)で2年間学び、40年にわたって女子教育に携わった。札幌の藤学園の寄宿舎、藤女子中学・高等学校および旭川藤女子中学・高等学校の保健室で生徒たちを世話し、悩みや相談事を聞くなど、親身になり、心を尽くして関わりを持った。定年退職後は、札幌マリア院で修道院内の仕事をして約1年半、その後石狩市の花川マリア院に移り、看護師として姉妹たちのために奉仕した。晩年は、自分にできることをしながら過ごしていた(以上北海道)。柔和な性格で、看護師の仕事も修道生活も静かに落ち着いて穏やかな精神をもって果たした。最期を悟った時、病室でさまざまな医療機器につながれているにもかかわらず、明るく顔を修道院に入会したことを喜び、はっきりと感謝の言葉を述べて旅立っていった。

告知板

■宮城

▶いのちの光3・15フクシマ講演会「原発の構造的暴力に抗(あらが)う」 3月14日(土)午後2時~4時、元寺小路教会大聖堂。講師=高野聡(原子力情報資料室 CNIC スタッフ)。無料(当日カンパあり)。☎ inochino hikari315@yahoo.co.jp 同実行委員会

■福島

▶いのちの光3・15フクシマ現地報告「15年の振り返りと、これから」とミサ 3月15日(日)午後1時~4時30分、原町教会聖堂。講師=田中徳雲師(曹洞宗同慶寺住職)。司式=幸田和生名誉補佐司教(東京教区)。無料(当日カンパあり)。☎ inochi no hikari315@yahoo.co.jp 同実行委員会

■東京

▶片柳弘史神父講演会「祈りの力」-『こころの深呼吸』シリーズを振り返って 3月7日(土)【講演会】午後2時~3時20分、麴町教会主聖堂、【交流会】3時30分~5時、同ヨセフホール。講師=片柳弘史神父(イエズス

会)。無料。☎deepbreath2026@gmail.com メルキゼデクの会

▶写教の会(その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い) 3月15日(日)午後4時30分~5時50分、麴町教会岐部ホール309号室。主宰=高橋登志子修道女(聖心会)。持参する物=筆ペン、文鎮、下敷き30×50㎝(フェルトまたは新聞紙)。3月12日(木)までに要参加申し込み。500円(自由献金)。☎phostere@gmail.com 古賀

▶港・品川宣教協力体主催「東日本大震災、能登半島地震・豪雨災害追悼ミサと『スモールクワイア』コンサート」 3月20日(金・祝)【コンサート】午後1時30分、【追悼ミサ】2時30分、目黒教会。司式=カマチョ・アントニオ神父(グアダルペ宣教会)、赤岩聰神父(東京教区)、江部純一神父(同教区)他。出演=イエスのカリタス修道女会。自由献金(全額をカリタス南相馬、カリタスジャパン〈能登地震緊急支援〉、名古屋教区能登地震募金窓口に送付)。電話03-3491-5461 目黒教会

番組

ラジオ心のともしび

(朗読・坪井木の実)

3月の放送日と執筆者 2日(月)岡野絵里子・3日(火)中島貴之・4日(水)三宮麻由子・5日(木)崔友本枝(ちえー・ともえ)・6日(金)山本久美子・7日(土)植村高雄・9日(月)堀妙子・10日(火)竹内修一(おさむ)・11日(水)下窄優美(しもさこ・ゆうみ)・12日(木)こいずみゆり・13日(金)松浦信行・14日(土)コリーン・ダルトン・16日(月)松本准平(じゅんぺい)・17日(火)森田直樹・18日

(水)湯川千恵子・19日(木)服部剛(ごう)・20日(金)萩原久美子・21日(土)中井利巳・23日(月)片柳弘史・24日(火)許書寧(きよ・しゅにん)・25日(水)熊本洋(よう)・26日(木)山本ふみり・27日(金)林尚志・28日(土)今井美沙子・30日(月)村田佳代子・31日(火)古川利雅(以上テーマ「道」)。

ホームページ(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。詳細は電話075-211-9341。



きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク) 3月

【教皇の意向：武装解除と平和】

各国が有効な武装解除、特に核武装の解除に向けて動き、世界の指導者たちが暴力ではなく対話へと歩みを進めていきますように。

【日本の教会の意向：性虐待被害者】

聖職者から性的な虐待を受けた方々のために祈ります。身勝手な思いと行動により、心と体に大きな傷を受けた方々が、神のいつくしみによって癒されますように。

教皇レオ14世は選出された最初の祝福の言葉の中で、復活したキリストの平和として「武器のない平和、武器を取り除く平和」を世界に語りました。そして、原爆投

下80周年のメッセージでも「核兵器は、わたしたちの共通の人間性を傷つけるとともに、被造界の尊厳をも裏切ります」と訴えています。前任の教皇フランシスコは、一層明確に「原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の保有は、それ自身が倫理に反しています」と述べています。無条件の愛に基づくキリストの平和をこの世界に実現するために、世界各国の指導者が善意の人々と心を合わせて、紛争解決の手段を武力によってではなく、対話によって進め、さらに世界を破滅へと導く核兵器の放棄に合意し、愛と尊厳に基づく相互信頼によって国際問題の解決を図っていくよう祈りましょう。

*

聖職者による年少者や若年男女への性虐待は世界的な問題となってきましたが、日本の教会においても性虐待の問題が報告されています。神の愛と誠実を説くはずの聖職者から性虐待を受けた方々の心と体の痛手は計り知れないものがあります。特に年少者の場合、自己不信に陥り二重の苦しみを負ってしまう場合もあります。被害者の心身の傷が神のいつくしみにより癒やされるとともに、二度と同じことを繰り返さない予防体制、被害者に寄り添う適切な支援や補償制度が一層整備されるよう祈りましょう。